

類については充分に検討されていないものが多い。本報ではそれらのうち4種について検討し、以下のような結論を得た。

1. 本州(伊豆半島)及び九州のオドリコガマは、中国大陸の *M. sino-strigosa* と同じである。

2. 台湾のタカサゴイシカグマは *M. trapeziformis* ではなく、雲南から記載された *M. trichosora* にあたる。この種類はインドシナやタイの *M. herbacea* の変種として扱うのがよい。

3. 台湾のニセイシカグマは独立種とする方がよい。

4. 屋久島のヤクシマカグマは、琉球や台湾のコウシュンシダと同じものである。屋久島で最近コウシュンシダと呼ばれていたものは、変種のホソバコウシュンシダ(新称)として区別される。

### ○ニセツキヌキサйко(新称)について(水島正美) Masami MIZUSHIMA: *Bupleurum lancifolium*, a new casual

市販の小鳥の餌料がこぼれ、庭先に妙なセリ科植物が生えた。全体に灰白味があり、茎下部の葉から上部のものに至るまで貫生し、単葉である。よく分枝して丸い草姿になり、5月から6月にわたって細黃花を開く。これは一見ツキヌキサйко(奥山氏が本誌 26: 349, 1951 に発表)を想起させるが、果実に明確な差異がある。和名ツキヌキサйкоの基準となる標本は東京品川区五反田駅附近で1951年5月に採られた花期のもので、果実の形質は分らない。特異な葉状に基いて *Bupleurum rotundifolium* L. と同定され、以後今日に至るまで、各地に見つかった同様な植物には上記の学名、和名を当て、済ませて来たようである。つまり花期に見得る形質が調べられただけであった。若しこれらが真の *B. rotundifolium* ならば、果実は長さ2-3mmで表面に粒状突起がないものである。だが拙宅に生えたものは果実が約2倍大で、表面に粒状突起を満布する。これは *B. lancifolium* Hornemann という地中海地方産の一種で、*B. rotundifolium* のように世界各地に帰化してはいない。ツキヌキサйкоが正しく後者に与えられた和名とせざるを得ない今日、前者にはニセツキヌキサйкоと新称しておく。兩種共に1年草と諸書にあるが、拙宅のニセツキヌキサйкоは昨年も今年も開花結実し、今年の方が大きく育った(主茎は単立)。6月中旬に1枝を残して標本に作ってしまったが、来年も萌芽してくれるかどうか。標本の一部を MAK 100800 として牧野標本館に納めてある。小文を草するに当り助言して下さった館岡亜緒、浅井康宏の両氏に深謝を捧げる。

(東京都立大学牧野標本館)